

現代日本語の語形成における「文の包摂」の研究

泉 大輔

本研究で研究の対象としているのは、「振り込め詐欺」「幻のポケモンをもらおう！キャンペーン」「いいねボタン」「朝はパンだ派」「かまってちゃん」など、文相当の要素に名詞や接尾辞が直接後続している言語形式である。本研究では、このような言語形式を、合成語のその内部に文相当の要素が包み込まれた言語現象ととらえ、便宜的に「文を包摂する合成名詞」（文包摂名詞）と呼んでいる。

通常、動詞の命令形（「振り込め」）や意志形（「幻のポケモンをもらおう」）、テ形（「かまって」）、助動詞「だ」の終止形（「朝はパンだ」）、終助詞（「いいね」）などで終了する文は、合成語の前項になり得ない。また、このような文は、「という」などの引用標識を介さずに名詞を直接修飾することはできない。したがって文包摂名詞は、従来の語形成規則には当てはまらない特異な言語現象であると言える。

文包摂名詞はこのように逸脱的な表現であるにもかかわらず、その使用は広く観察される。例えば、ブログなどのウェブ上のテキスト、SNS上のテキスト、広告表現やキャッチフレーズ、日常会話など、話し言葉や打ち言葉で特にその実例が多数見られる。しかし、従来の日本語研究では、文包摂名詞は研究の対象として詳細に記述・考察されてこず、このような特異な言語現象についてその実態は明らかにされていない。

そこで、本研究では次の2つを研究の目的とし、現代日本語における文包摂名詞を対象に記述的・理論的考察を行っている。第一に、実例に基づき、文包摂名詞の出現状況を調査し、実証的にその形式的・意味的な特徴を記述することである。第二に、文包摂名詞の形成を可能とする日本語の仕組みについて、理論的に解明することである。

本論文は5部13章から成る。第1部の序論では、第1章で研究の目的、研究の背景、考察の対象、研究方法などについて述べている。第2章では、文包摂名詞に関連する先行研究の検討を行い、本研究で明らかにすることを示している。

第2部の本論Iおよび第3部の本論IIは文包摂名詞の記述的な考察である。第2部は3章および4章から成り、各論に入る前の総論として位置付けている。第3章では、調査に用いるコーパスについて説明した後、得られたデータに基づき、文包摂名詞の出現状況を明らかにした。まず、実例の収集では、ウェブ上の日本語のテキストが約100億収録されて

いる『国語研ウェブコーパス』を用いて、約 1.5 万件のデータを採取した。本研究では、コーパスから得られたデータを中核的な資料とし、その他にも筆者がテレビ番組や広告などから採取した用例を補助的な資料として用いている。このような調査資料における文包摂名詞の出現状況を見たところ、少なくとも 232 種類の名詞や接尾辞が文包摂名詞の後項になり得ることが明らかとなった。特に用例数が多く観察されたのは、「程度」「状態」「発言」「感」などであった。

続く第 4 章では、実例をもとに文包摂名詞の形式的な特徴および意味的な特徴について実証的に記述し、文包摂名詞の全体像を明らかにしている。文包摂名詞の後項になり得る形式の意味的な特徴としては、抽象的な概念を表すものが多いという傾向が見られる。例えば、言語活動を表す形式、思考・心情・方針を表す形式、性状を表す形式、活動・出来事を表す形式、変化・作用を表す形式などがある。用例数は多くないものの、物体や人物を表す形式も見られた。

また、前項には、独立語文・述語文、単文・複文、言いさし文、2 つ以上の文など、どのような形式の文であってもなり得ることが明らかになった。他にも、前項の文相当の要素には、感嘆符や疑問符、顔文字や絵文字、鉤括弧などが付された実例が多数見られ、話し言葉や打ち言葉に特有の記号が用いられやすいという表記的な特徴があることが明らかになった。ただし、このような形式的な自由度の高さがあるものの、どのような形式の文であっても前項になるわけではない。後項の名詞や接尾辞が表す意味と、意味的に親和性の高いモダリティを表す文相当の要素が前項になりやすいという特徴が見られる。

第 3 部の本論Ⅱは各論である。第 5 章から第 8 章ではそれぞれ、文包摂名詞を形成し得る後項のうち、「発言」「感」「程度」「攻撃」に着目し、その形式的・意味的特徴を詳細に記述した。先行研究では文包摂名詞の後項となり得る個別の名詞や接尾辞を取り上げ、その諸特徴を詳細に見たものはほとんどない。本研究では、文包摂名詞の後項になり得るものの中でも特に実例が数多く観察される「発言」「感」「程度」「攻撃」の 4 つについて、その形式的・意味的な諸特徴を記述することができた。

第 4 部の本論Ⅲ（第 9 章～第 12 章）は文包摂名詞の理論的な考察である。なぜ文包摂名詞という特異な言語表現が形成可能であり、現代日本語において広く使用されているのかを明らかにした。具体的には、文包摂名詞の成立と使用は、「①引用によって獲得される語構成上の要素性」（形態的な基盤）、「②典型的な語が有する種々の性質との並行性」（構文的な基盤、語彙的な基盤、音韻的な基盤）、「③文包摂名詞特有の表現性」（表現効果的な基盤）によって複合的に支えられているということを明らかにした。第 9 章では形態的・構文的な基盤について、第 10 章では語彙的な基盤について、第 11 章では音韻的な基盤について、

第 12 章では表現効果的な基盤について論じている。

まず、「①引用によって獲得される語構成上の要素性」について述べる。文包摂名詞は、形態的な側面から見ると、一般的な合成名詞の前項にはなり得ない文相当の要素がその構成要素となっている。そのような逸脱があるにもかかわらず、文包摂名詞の形成を支えている形態的な基盤には、引用の性質がある。引用された言葉は、その引用先の環境に応じてその言語単位を構成する要素としての機能を獲得する。このような引用の性質によって、通常は合成名詞の前項にはなり得ない文相当の要素であっても、その文相当の要素が 1 つの語構成要素として機能するのだと考えられる。これが、合成名詞の前項になり得ない文相当の要素を前項に持つ合成名詞が形成される形態的な基盤である。

次に、「②典型的な語が有する種々の性質との並行性」とは、文包摂名詞に見られる性質が、構文的な側面、語彙的な側面、音韻的な側面において、典型的な合成名詞が持つ種々の性質と並行するということである。典型的な合成名詞は一般に、次のような形態的・構文的・語彙的・音韻的な特性を持つ。形態的な側面では、まず、典型的な合成名詞の語構成として、名詞または名詞的な接尾辞を後項に持ち、名詞、動詞の連用形、形容詞語幹、副詞などを前項に持つ（「経済問題」「上り坂」「嬉し涙」「ポイ捨て」など）。また、典型的な合成名詞は曲用する際、「が」「を」「に」など種々の格助詞がそれに後接する。

構文的な側面では、典型的な合成名詞は格助詞「が」「を」「に」などを伴って主語や補語として機能したり、助詞「の」を伴って連体修飾語として機能したり、助動詞「だ」を伴って述語として機能したりする。語彙的な側面では、典型的な合成名詞は、現実・観念の世界を個々の断片に切り取り、それを一般的に名づける。音韻的な側面では、典型的な合成名詞は基本的に、ひとまとまりの音調で発音される（「ケーザイモンダイ）。ただし、3 つ以上の要素から成る合成名詞が右分かれ構造を持つ場合では、最後部の要素とその 1 つ前の要素のみがひとまとまりの音調になる（「チホーコーキョーダンタイ）。

文包摂名詞の形態的な側面を見ると、曲用の仕方は同じだが、その前項となる要素は典型的な合成名詞とは異なり、文相当の要素である。この点では、文包摂名詞は典型的な合成名詞の形態的性質に当てはまらない言語形式である。しかし、形態的な側面以外の種々の側面においては、文包摂名詞にも典型的な合成名詞と同様の特性が見られる。このような構文的・語彙的・音韻的な並行性が、形態的には特異であっても、文包摂名詞が合成名詞として使用されることを支える基盤となっていると考えられる。

最後に、「③文包摂名詞特有の表現性」についてまとめる。文包摂名詞は、表現したい対象を表す語が命名者の心的語彙にはない場合に、比較的自由に前項と後項を組み合わせ、その表現対象を新たに名づけることができる。作り出された文包摂名詞は、(a) 引用された

言葉に特有の表現効果、(b) 逸脱表現に特有の表現効果を持つ。(a) は、「表現対象に関する具体的なイメージを聞き手にリアルに伝達できるという効果」や「表現対象に対する表現者の主観的な評価が聞き手に想起されるという効果」である。これらは引用の性質に支えられて発現する表現効果である。(b) は、「新奇性（おもしろさ・インパクト）を聞き手に与えられるという効果」である。これは文包摂名詞の逸脱性に支えられて発現する表現効果である。これらの2つの表現効果は、一般的な合成名詞では発現しないものであり、引用された言葉を前項に持ち、逸脱的な表現である文包摂名詞に特有の表現効果である。これらの表現効果の発現が文包摂名詞の使用を動機付ける基盤になっていると考えられる。

第5部の結論（第13章）では、本研究で明らかになったことをまとめ、今後の展望について述べている。本研究では、文包摂名詞の出現状況の調査およびその形式的・意味的な特徴について記述し、逸脱的な表現である文包摂名詞の形成および使用を支える基盤を解明した。本研究は、先行研究ではこれまで明らかになっていなかった文包摂名詞の実態およびその成立を支える仕組みを明らかにした点に意義があると考えられる。

さらに、引用研究の射程が広がった点も本研究の意義の1つであると考えられる。従来、引用研究は構文論や談話研究において文の単位や談話の単位が考察の対象とされてきた。しかし、本研究は、文包摂名詞の形成を支える基盤について考察する過程で、引用された言葉が語構成要素として機能することを示した。これにより、引用研究は語形成論において語の単位も考察の対象となり得ることが明らかとなった。

また、本研究は通時的・通言語的な観点からも示唆が得られている。まず、本研究で言う文包摂名詞に相当する合成名詞は、歴史的な観点から見ると、『源氏物語』や『今昔物語集』などでも観察される。例えば、「負けじ魂」「つれなし顔」「ご覧ぜさせよ顔」といった用例の前項は、いずれも通常は文末で用いられ、合成名詞の前項にはならないものである。続いて、通言語的な観点から見ると、英語には、「Save-the-WHALES campaign」（鯨を救おう運動）や「'We love Anne DIAMOND' party」（アン・ダイヤモンド愛してます党）のように、日本語の文包摂名詞に類似する合成名詞が見られる。前者は「Save the WHALES」という文相当の要素がハイフンを伴って合成名詞の前項になっている。後者は「We love Anne DIAMOND」という文相当の要素が引用符を伴って合成語の前項になっている。

このように、文包摂名詞に相当する言語現象は現代日本語だけでなく、古典日本語や英語にも見られ、本研究は文包摂名詞が通時的・通言語的に普遍的な造語法ではないかという示唆を提示している。今後はこのような通時的・通言語的な観点も視野に入れて文包摂名詞の考察を進めていくことで、日本語における造語の性質の一側面を明らかにし、語形成論に資する研究を目指す。